

研究ノート

クシュ王国の王墓地におけるタカラガイの出土例について —紀元前8世紀～紀元後4世紀—

坂本麻紀（アラブ調査室研究員）

はじめに

クシュ王国がエジプトを支配した第25王朝（クシュ朝；714-656 BCE¹）は、エジプトの歴史では第3中間期（1069-656 BCE²）に含められることが多い。エジプトの新王国時代に植民地であったヌビア地域が、第3中間期にどのような状況にあったのか、近年の発掘調査によって徐々に明らかになりつつあるが³、まだはっきりしない。そのため、エジプトの第25王朝を成立させたクシュ王国についても、ナイル川第4急湍のナパタ地域を拠点として発展したと考えられているが、いつ頃どこで興ったのか、いまだにはっきりしない。しかし、断片的に確認できる資料などから、おそらく紀元前1000年頃からナパタ地域で徐々に力をつけていったのではないかと考えられている⁴。

この時期のヌビア地域の年代に関しては、クシュ王国がナパタ地域を活動の中心とした時期をナパタ期（1000-300 BCE⁵）、ナイル川第5急湍と第6急湍の間に位置するメロエ地域を活動の中心とした時期をメロエ期（BCE 300-350 CE）と呼んでいる。エジプトの第3中間期はヌビア地域の年代ではナパタ期に含まれるが、すでに発掘報告書などで知られるヌビア地域の資料に関しては、第25王朝の基礎を築いたクシュ王ピアンキ（Pianky もしくはピイ Piye；744-714 BCE⁶）以降のものがほとんどである。そのため本レポートで扱うデータも第25王朝以降となる。

本レポートではクシュ王国の王墓地の発掘報告書「The Royal Cemeteries of Kush Vol. I, II, IV, V」に記載されているナパタ期からメロエ期の6つの墓地から出土するタカラガイ（Cowrie）とタカラガイの模倣品、その他の貝（巻貝、二枚貝など）のデータをまとめ、エジプトなどで言わわれているように、子どもや女性の墓でタカラガイが出土する傾向が高いということがヌビア地域でも言えるのか、具体的に見てていきたい。

1. 分析対象と方法

クシュ王国の6つの王墓地におけるタカラガイの出土状況を確認するため、それぞれの発掘報告書の出土品の中から「Cowrie」というキーワードで検索を行った。また、王墓地ではないが、ナパタ地域で約1,550基の墓が見つかっているナパタ期の大規模な墓地サナム（Sanam）遺跡の研究を行っているローヴァッサー（A. Lohwasser）によると、「サナムの子どもの墓（特に乳児）からは貝が見つかっている。特筆すべきは子どもの墓の貝は主にタカラガイであるが、大人の墓からは他の種類の貝が見つかっている」（Lohwasser 2010, p.80）という点に着目し、「Shell」というキーワードでも検索を行った。ただし、今回は貝の形をした出土品を対象としたため、ディスクビーズなどビーズの材質に「Shell」が使われているものは除外した。また、貝そのものではないが、貝の形を模倣した出土品は分析の対象に含めている。

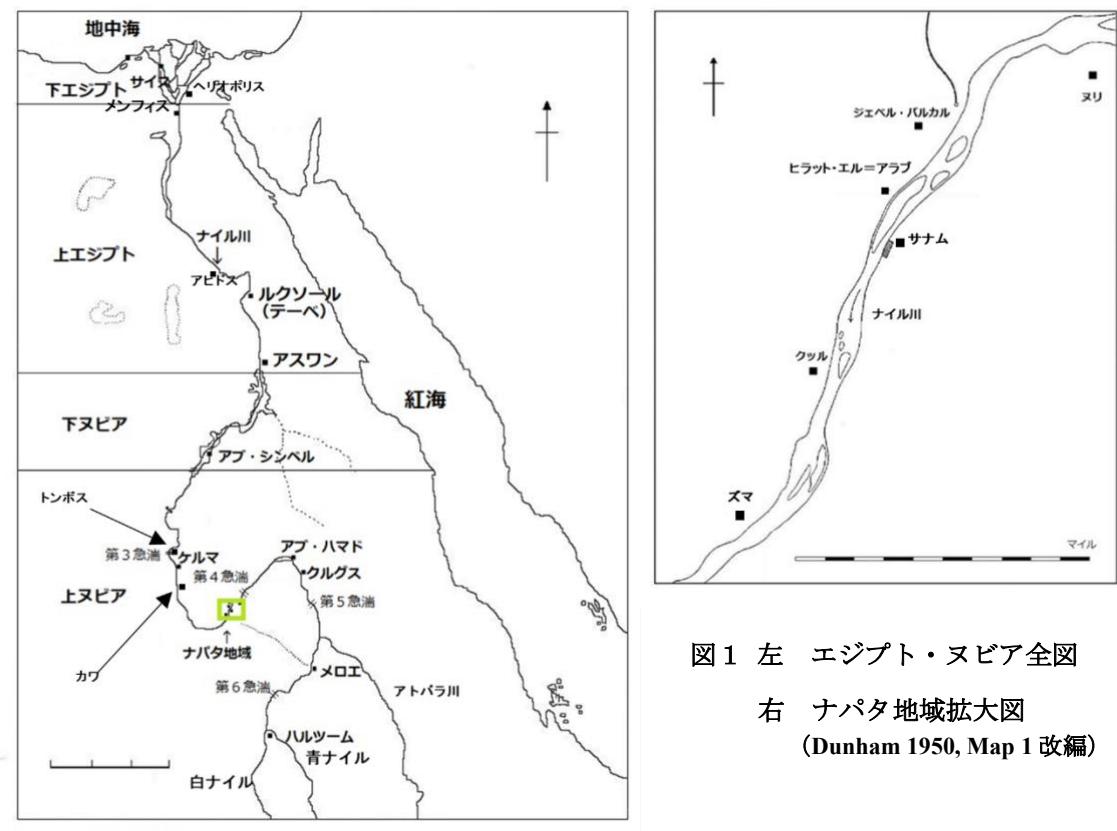


図1 左 エジプト・ヌビア全図
右 ナパタ地域拡大図
(Dunham 1950, Map 1 改編)

①クシュ王国の王墓地について

本レポートで扱うクシュ王国の王墓地は、ナパタ地域にあるクッル (Kurru)、ヌリ (Nuri)、ジェベル・バルカル (Jebel Barkal)、そしてメロエ地域にある西墓地 (West Cemetery at Meroe)、南墓地 (South Cemetery at Meroe)、北墓地 (North cemetery at Meroe) の計 6 つである。これらの墓地の中で第 25 王朝と関連する墓地は、クッル、ヌリ、メロエの西墓地と南墓地の 4 つであるが、メロエの西墓地に関しては、第 25 王朝の時期からメロエ末期まで 1 千年以上に亘って継続的に墓の造営が行われている。

クシュ王国は紀元前 3 世紀頃に王都をナパタ地域からメロエ地域に移すが、王墓地もナパタ地域からメロエ地域へ移る。「聖なる山」ジェベル・バルカルの西側にはナパタ末期からメロエ初期のピラミッドがあるが、それらの中に名前不詳の王の墓が含まれると考えられ、遷都の際に様々な混乱があったことが推測される。新たな王墓地となったメロエ地域は、メロエ初期に南墓地に 2 人の王と王妃たちの墓が築かれた後、南墓地の向かいの丘陵上に造られた北墓地がメロエ末期までのクシュ王国の王墓地となる。以下に 6 つの墓地の年代と墓の数などを記す。

・クッル：ナパタ期（紀元前 1000 年頃⁷～第 25 王朝の時期まで）、約 60 基

タハルカ (Taharqa ; 690–664 BCE) を除く第 25 王朝の王や王妃たちと、ピアンキに先行する古い型式の墓（墳丘墓やマスタバ）がある。ピアンキとタハルカを除く第 25 王朝の王たちの馬の墓もあり。主要な墓が築かれるのは第 25 王朝の時期までであるが、名前不詳の

王 (Ku.1) とおそらくその王妃 (Ku.2) のものとみられるピラミッドがナパタ末期（紀元前 4 世紀末頃）にピアンキの墓のそばに築かれている。また主要な墓のあるエリアから 400m 以上離れた北側でメロエ期の墓が 3 基見つかっている。

・ヌリ：ナパタ期（第 25 王朝～ナパタ末期まで）、約 73 基

タハルカが新たに築いた王墓地。ただしタハルカの次の（第 25 王朝の最後の）王タヌタマニ (Tanutamani ; 664–656 BCE⁸) はクツルに墓を築いている。タハルカの息子アトラネルサ (Atranersa ; 653–643 BCE⁹) 以降のクシュ王と王妃たちの墓がナパタ末期までここに造られた。

・メロエ西墓地：ナパタ期～メロエ末期、約 820 基

クシュ王ピアンキの時期に墓の造営が始まり、メロエ末期まで 1 千年以上に亘って王族や高官の墓が築かれたとされる。西墓地の 3 km ほど東にある南墓地との関係は不明だが、西墓地のほうが墓の造営が早く始まったと考えられている¹⁰。

・メロエ南墓地：ナパタ期～メロエ初期、約 216 基

西墓地と同じく、クシュ王ピアンキの時期から造営が始まり、ナパタ期末までは王族や高官の墓、メロエ期の始めには 2 人の王とその王妃たちの墓（ピラミッド）が築かれたと考えられている。メロエ期のピラミッドが築かれてすぐ、王墓地は幅約 200m の巨大なワディ（涸れ谷）を挟んだ向かい側の丘陵上に新たに造られた北墓地に移る。

・メロエ北墓地：メロエ期（メロエ初期～末期まで）、約 44 基

クシュ王国最後の王墓地。南墓地から移転した王墓地。メロエ期の王と、王と共同統治を行った女王や王子の墓がメロエ末期まで築かれた（王妃やマイナーな王族の墓は西墓地に築かれた）。

・ジェベル・バルカル：ナパタ末期～メロエ期、約 25 基

紀元前 3 世紀頃にクシュ王国の王都がナパタ地域からメロエ地域へ移転するが、その時期に年代付けられるピラミッドがジェベル・バルカルの西側に建造された。ピラミッドは南と北でそれぞれグループを形成しているが、墓の被葬者については不明な点が多い。

②タカラガイ、タカラガイの模倣品、その他の貝について

本レポートでは 6 つの王墓地の出土品の中から「Cowrie」と「Shell」で検索されたものを「タカラガイ」「タカラガイの模倣品」「その他の貝（模倣品を含む）」の 3 つに分類した。今回はタカラガイの出土状況を確認することを目的としたため、タカラガイに関しては、貝と模倣品を別の分類としたが、その他の貝については模倣品を同じ分類に含めた。3 つの分類に含まれるものを以下に挙げる。

・タカラガイ

貝そのものが出土している場合だけでなく、貝だけでプレスレットやアンクレットなどの

装身具を形作っている場合、アミュレットなど他の出土品とともにブレスレットやネックレスなど装身具を形作っている場合がある。1点だけ「Glazed steatite scaraboid (cowrie back, inscribed)」と記述された凍石製のスカラベが見つかっている¹¹。貝に関しては、「split cowrie shell」や「cowrie with back cut」、「cut cowrie shell」と記述されているものが多い。殻の背面を削ったものに関しては、おそらく装身具などに用いるために加工がなされたものと考えられる。

・タカラガイの模倣品

出土件数は多くないが、主に「imitation cowrie」と記載されているものを模倣品として分類した。材質は金、銀、カーネリアン (carnelian)、緑柱石 (beryl) となっている。「gold imitation cowrie」とは別に「gold cowrie」と書かれたものが3件ほどある¹²。発掘報告書のモノクロ写真では、貝なのか貝の模倣品なのか判別できなかったが、タカラガイの一種で「Golden cowrie」(和名 ナンヨウタカラガイ) という貝は日本の南西諸島から南太平洋が分布域となっているため、クシュ王国の王墓地で見つかっている「gold cowrie」は金製のタカラガイを模倣したものであると判断し、模倣品に分類した。

・その他の貝（模倣品を含む）

その他の貝に関しては、具体的な貝の名称は真珠貝 (pearl shell, mother of pearl shell) を除くとほとんど記述されていない。「Shell」や「natural shell」とだけ記述されているものに加え、巻貝 (snail shell, spiral shell, univalve shell)、円錐形の貝 (conical shell)、樽形の貝 (barrel-shaped shell)、スコップ？形の貝 (scoop-shaped shell)、二枚貝 (bivalve shell) となっている。また模倣品に関しては、青銅製の貝のほか、金属の薄い板の貝？ (sheet metal shell) という記述があった。これらの貝の中には穴が開けられたものや、殻の背面が削られたものなどがあり、タカラガイでみられるものと同じように装身具などに用いられたのではないかと思われる。

2. タカラガイ、模倣品、その他の貝の出土状況

クシュ王国の6つの王墓地の発掘報告書では、およそ1,454基が墓として確認できる。これらの墓の出土品を対象に「Cowrie」と「Shell」という用語で確認したところ、「タカラガイ」「タカラガイの模倣品」「その他の貝（模倣品を含む）」に該当する墓は118基であった。また、118基のうち複数の組み合わせを持つ墓も19基みられた。

①王墓地と貝の出土状況

表1は6つの王墓地から貝類が出土した墓118基について、貝類の出土内容を王墓地別にまとめたものである。この表を見ると、タカラガイや貝類は、王墓地全体の1割弱 (8.1%) の墓でしか見られない出土品であることが分かる。また、王墓地別に見た場合、出土数は西墓地が全体の7割弱 (67.0%) にあたる79基と多いが、西墓地では「タカラガイ」だけでなく、「その他の貝（模倣品を含む）」の出土も多い。また、ヌリに関しては「その他の貝（模倣品を含む）」のみ出土していることが分かる。

王墓地	各墓地の墓 (総数)	貝類が出土し た墓の数	A	B	C	D	E	F	G		出土内容
クッル	約60基	8基	6	1	1	0	0	0	0	A	タカラガイ
ヌリ	約73基	7基	0	0	7	0	0	0	0	B	タカラガイの模倣品
メロエ西墓地	約820基	79基	35	1	27	3	10	1	2	C	その他の貝 (模倣品含む)
メロエ南墓地	約216基	14基	5	0	6	0	3	0	0	D	タカラガイ+タカラガイ の模倣品
メロエ北墓地	約44基	8基	2	0	6	0	0	0	0	E	タカラガイ+その他の貝 (模倣品含む)
ジェベル・バルカル	約25基	2基	2	0	0	0	0	0	0	F	タカラガイの模倣品+そ の他の貝(模倣品含む)
合計	1454基	118基	50	2	47	3	13	1	2	G	タカラガイ+タカラガイの模 倣品+その他の貝(模倣品 含む)

表1 左：貝類の出土状況（王墓地ごと）、右：出土内容を A～G の 7 つに分類したもの

出土した墓の数自体は少ないが、ジェベル・バルカルでは「タカラガイ」のみ出土しており、またクッルも「タカラガイ」の出土の割合が他の貝類に比べて高いと言える。

②墓の年代と貝類の出土状況

表2は貝類の出土状況を墓の年代別にまとめたものであるが、表2の確認前に、本レポートで用いた「墓の年代」について説明をしたい。クシュ王国の王墓地のうち、特にメロエの西墓地に関しては、墓の年代を決定できる出土品がない場合が多く、造営年代がはつきりしない墓が多い。近年の研究では西墓地は南墓地より少し早い時期に墓の造営が始まったとされているが、西墓地の発掘報告書では約 820 基の墓のうち 35%にあたる 290 基の墓が「年代不明」となっている。また、年代が記載されている墓に関しても、年代幅が 200 年と非常に広く設定されている場合が多いため、ナパタ期とメロエ期のように分けるのが簡単で分かり易いように思う。しかしながら、本レポートではクッルやヌリといった第 25 王朝の時期に関わる墓を扱うことから、クシュ王ピアンキを含めた第 25 王朝の王たちの時期を「第 25 王朝」、発掘報告書の年代幅は大きいが第 25 王朝の時期を含むものを「ナパタ期（第 25 王朝を含む）」、それ以外のナパタ期の墓を「ナパタ期（その他）」、そしてメロエ期の墓を全て「メロエ期」とした。

貝類が出土した墓を表2のナパタ期とメロエ期という 2 つの時期でみた場合、118 基中ナパタ期が 78 基となっており、全体の 66.1%を占めている。しかし、タカラガイやその他の貝の出土に関しては、「第 25 王朝」と「メロエ期」はそれほど変わらない。それぞれの王墓地の年代別の出土状況については、特筆すべき点は見当たらないように思うが、西墓地ではメロエ期に「タカラガイ」「タカラガイの模倣品」「その他の貝（模倣品を含む）」が単体で出土する傾向が見られる。

出土内容	貝類が出土した墓の数	墓の年代(王墓地別)			
		第25王朝	ナバタ期 (第25王朝を含む)	ナバタ期 (その他)	メロエ期
A	50	クッル 5 西墓地 7 南墓地 4 16	西墓地 10	西墓地 4	クッル 1, 南墓地 1 西墓地 14, 北墓地 2 バルカル 2 20
B	2	クッル 1	0	0	西墓地 1
C	47	クッル 1, 西墓地 8 ヌリ 3, 南墓地 1 13	西墓地 8 南墓地 2 10	ヌリ 4, 西墓地 1 南墓地 2 7	西墓地 10, 南墓地 1 北墓地 2 17
D	3	西墓地 1	西墓地 1	0	西墓地 1
E	13	西墓地 5 南墓地 2 7	西墓地 4	西墓地 1 南墓地 1 2	0
F	1	西墓地 1	0	0	0
G	2	西墓地 1	0	0	西墓地 1
合計	118	40	25	13	40

表2 貝類の出土状況を墓の年代別にまとめたもの

③墓の被葬者と年代

表3は貝類の出土した 118 基の墓の被葬者と年代を王墓別にまとめたものである。この表を確認すると、半分以上の 62 基が被葬者不明となっており、特にメロエ西墓地では 79 基中 49 基 (62.0%)、メロエ南墓地では 14 基中 11 基 (78.6%) と、この 2 つの墓地に関しては非常に高い割合で被葬者の特定ができない状況であることが分かる。

王墓地	貝類が出土した墓の数	子ども			成人			馬	被葬者不明		
		子ども 計	内訳		成人 計	内訳					
			性別不明	女子		性別不明	女性				
クッル	8基	0	0	0	1	0	25王朝 1	0	25王朝 6 メロエ 1		
ヌリ	7基	0	0	0	7	0	7 25王朝 3 ナバタ 4	0	0		
メロエ西墓地	79基	19	25王朝 1, ナバタ 4 ナバタ 3, メロエ 1 17	25王朝 1 メロエ 1	11	10 25王朝 1, メロエ 3 ナバタ 4	25王朝 1	0	0 49 25王朝 15, ナバタ 2 ナバタ 11, メロエ 21		
メロエ南墓地	14基	0	0	0	3	ナバタ 1	メロエ 2	0	0 11 25王朝 7, ナバタ 2 ナバタ 2		
メロエ北墓地	8基	0	0	0	7	0	メロエ 1	メロエ 6	0 メロエ 1		
ジェベル・バルカル	2基	0	0	0	2	メロエ 1	メロエ 1	0	0		
合計	118	19	17	1	1	31	12	13	6 62		

表3 貝類の出土した墓の被葬者と年代を王墓地別にまとめたもの

被葬者が判明している墓のうち、子どもの墓は 19 基全てがメロエ西墓地となっており、年代に関しては「第 25 王朝」が 3 基、「ナパタ期（第 25 王朝を含む）」が 8 基、「ナパタ期（その他）」が 4 基、「メロエ期」が 1 基となっている。西墓地は貝類の出土している墓の 6 割ほどが被葬者不明となっているが、筆者が以前、西墓地の子どもの墓について調べた際、西墓地で確認できる 820 基ほどの墓のうち 8 割が遺体の痕跡がない墓であったが、墓の型式等から子どもの墓と推定されているもの（追加で推定できるものを含む）が 2 割ほどであった。本レポートで使用している西墓地の墓のデータは、子どもの墓として最大限推定できる 210 基を含んだものであるため、貝類の出土した被葬者不明の墓に子どもの墓が含まれている可能性はそれほど高くないと思われる。この点を踏まえて考えると、210 基ほどある西墓地の子どもの墓から貝類が出土する割合は 1 割に満たず（9.1%）、子どもの墓と貝との関係をどのように考えるべきなのは、それぞれの墓で見られる貝類の出土状況を確認してからにしたい。

成人の墓 31 基のうち 4 割弱が性別不明であるが、おそらく被葬者不明の墓もここに含めることができるのではないかと思われる。成人女性の墓は 31 基中 13 基（41.9%）と数は多くないが、全ての王墓地で確認することができる点と、特にヌリは貝類が出土した 7 基全てが女性の墓となっている点が、女性と貝との関係を考える上で重要と思われる。成人男性の墓の数は非常に少ないが、メロエ北遺跡でのみ貝類が出土する点は非常に興味深い。女性の墓も含めて、貝類の出土状況を確認した上で、成人と貝類との関係を考えてみたい。

クッルの馬の墓については、クシュ王ピアンキと第 25 王朝の王であるシャバタカ（Shabataka ; 714–705 BCE）、シャバカ（Shabaka ; 705–690 BCE）、タヌタマニの馬の墓であることが知られている。馬を埋葬するという慣習はピアンキから始まったと考えられており、第 25 王朝のクシュ王たちの特徴の 1 つとされている（ヌリに新しい王墓地を造ったタハルカは除く）。クッルの墓からはチャリオットは見つかっていないが、クッルに埋葬された馬はチャリオット用と考えられており、4 頭 1 組であったと考えられている。クッルの馬の墓は全部で 24 基造られているが、貝類が出土しているのは 6 基のみであり、ピアンキ¹³、シャバタカ、シャバカの馬の墓と考えられる。

④墓の被葬者と貝類の出土状況

貝類が出土した墓 118 基の被葬者と出土した貝について表 4 にまとめた。

本レポートの目的は、エジプトの遺跡などで言われるよう、子どもや女性の墓でタカラガイが出土する傾向が高い、ということがヌビア地域でも言えるのか確認することにある。また、ローヴァッサーが「ナパタ期の墓地サナムでは、子どもの墓から見つかる貝は主にタカラガイであるが、大人の墓からは他の種類の貝が見つかっている」ということが王墓地でも見られるのか、という点についても併せて確認する。墓の数は非常に少ないが、表 4 の子どもの墓と成人の墓に着目し、貝の出土状況をそれぞれ見ていく。

④-1 子どもの墓

・タカラガイ：

タカラガイは A 「タカラガイ」、D 「タカラガイ+タカラガイの模倣品」、E 「タカラガイ+その他の貝（模倣品を含む）」、G 「タカラガイ+タカラガイの模倣品+その他の貝（模倣品を

含む)」でみられる。貝類が出土している子どもの墓は19基あるが、タカラガイについてはAが11基、Dが2基、Eが3基となっており、計16基(84.2%)の墓がタカラガイを持っていた。Aの11基のうちの4基とDの2基の計6基は、プレスレットやアンクレット、ネックレスなど、タカラガイを使った装身具であった。残りの10基から出土しているタカラガイに関しては、殻の背面が削られているものがほとんどであり、多くの場合1つの墓から複数個のタカラガイが見つかっていることから、これらも装身具であった可能性が高い。

・タカラガイの模倣品：

子どもの墓で確認できるタカラガイの模倣品は、Dが2基、F「タカラガイの模倣品+その他の貝(模倣品を含む)」が1基で計3基(15.8%)であった。この3基の墓は全て金製のタカラガイの模倣品であり、それぞれの墓から2~3個出土している。

・その他の貝：

子どもの墓で確認できるその他の貝は、C「その他の貝(模倣品を含む)」が2基、Eが3基、Fが1基で計6基(31.6%)であった。CとEの墓各1基から巻貝が出土しており、またEの墓の1つからは二枚貝が出土している。残りの3つの墓は天然貝や貝となっている。

出土 内容	貝類が出土 した墓の数	子ども			成人			馬	被葬者 不明		
		子ども 計	内訳		成人 計	内訳					
			性別不明	女子		性別不明	女性				
A	49	11	10	1	0	11	6	3	2	5	23
B	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
C	47	2	1	0	1	18	4	9	5	0	27
D	3	2	2	0	0	0	0	0	0	0	1
E	14	3	3	0	0	2	1	1	0	0	8
F	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
G	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	118	19	17	1	1	31	11	13	7	6	62

表4 墓の被葬者と貝類の出土内容をまとめたもの

④-2 成人の墓

・タカラガイ：

貝類が出土している成人の墓は31基あるが、タカラガイについてはAが11基、Eが2基となっており、計13基(41.9%)の墓がタカラガイを持っていた。子どもの墓と違いプレス

レットやアンクレット、ネックレスなどが出土したという記述はないが、E の墓の 1 つから殻の背面が削られたタカラガイが 64 個出土している例や、A の墓の 1 つから 20 個出土している例などがあり、これらはタカラガイを使った装身具であった可能性が考えられる。また、西墓地の第 25 王朝の時期の E の女性の墓からタカラガイと凍石を組み合わせたスカラベが 1 つ出土している。残りの A の墓 10 基から出土しているタカラガイに関しては、子どもの墓では殻の背面が削られているものがほとんどであったが、成人の墓では殻の背面が削られている例は 2 基だけであり、タカラガイそのものが出土している墓が 3 基あった。多くの場合タカラガイが壊れて出土しているため、どのような使われ方をしていたのか推測するのは難しい状況である

成人の墓のうち、女性と男性の墓から出土するタカラガイについて何か特筆すべき点があるとすれば、先ほど記述したタカラガイと凍石を組み合わせたスカラベが女性の墓から出土している点と、貝類が出土している女性と男性の墓ではタカラガイの出土割合が子どもの墓に比べてかなり低い（女性の墓で 30.8%、男性の墓で 28.6%）ということくらいである。

・タカラガイの模倣品：

成人の墓ではタカラガイの模倣品は確認されていない。

・その他の貝：

成人の墓で確認できるその他の貝は、C が 18 基、E が 2 基で計 20 基（64.5%）と非常に多く、子どもの墓から出土するその他の貝の割合（31.6%）と比べると、二倍となっている。出土した貝の種類では巻貝が一番多く、C が 5 基、E が 2 基の計 7 基の墓から出土しており、5 基が spiral shell、2 基が univalve shell となっている。また二枚貝が 3 基、真珠貝が 3 基、円錐形の貝が 1 基、樽形の貝が 1 基から出土するなど、様々な貝が見られる。通常の貝は 4 基の墓でみられる。また、「sheet metal shell without back」と書かれた金属製の貝の模倣品がナパタ期の王妃の墓から見つかっている。

女性と男性の墓に関して言えば、どちらもその他の貝の出土が 7 割を超えており（女性は 10 基で 76.9%、男性は 5 基で 71.4%）。男性の墓 5 基は全てメロエ期の王の墓であり、真珠貝が 3 基、巻貝が 2 基出土している。女性の墓からは二枚貝が 3 基、巻貝が 2 基、通常の貝 4 基に加え、金属製の貝の模倣品が 1 基出土している。女性の墓の年代は「第 25 王朝」5 基、「ナパタ期（その他）」4 基、「メロエ期」1 基となっているが、出土する貝に年代の差による違いはほとんどみられない。

3. 結論

本レポートではヌビア地域の墓から出土するタカラガイと被葬者の関係を探るため、クシュ王国の王墓地 6 か所の発掘報告書に記載されている出土品を対象に「タカラガイ（Cowrie）」と「貝（Shell）」というキーワードで検索を行った。計 118 基の墓が検出され、王墓地別、年代別、被葬者別に出土した貝類を「タカラガイ」「タカラガイの模倣品」「その他の貝（模倣品を含む）」の 3 つに分類したが、118 基中 68 基（57.6%）が被葬者不明や馬の墓となっており、貝と被葬者の関係を検討するには非常に厳しい状況であった。

結果的に子どもの墓は成人の墓に比べてタカラガイが多く出土していると言えるが、

それは「貝類が出土する墓の中では、成人の墓より子どもの墓のほうがタカラガイが多く出土する」と言うほうが正しいように思われる。クシュ王国の王墓地に関しては、貝類が出土する墓の割合が全体の1割未満であり、また貝類が見つかったメロエの西墓地の子どもの墓に関しても、210基のうちの19基でしか貝類が出土していないという点は、タカラガイを含む貝類を考える上で非常に重要だと言える。

また、サナムの墓地で見られる「子どもの墓からはタカラガイの出土が多いが、大人の墓からは他の種類の貝が出土する」という点については、今回検証を行ったクシュ王国の王墓地の墓も同じと言える。今後はサナムやセディンガといったナパタ期の墓地の出土状況を確認し、ヌビア地域の貝類と被葬者の関係について調べを進めたい。以下に今回の結果を簡単にまとめた。

- ① 子どもの墓ではタカラガイの出土が多く（19基中16基 84.2%）、成人の墓ではタカラガイの出土は若干低い（31基中13基 41.9%）。ただし、性別が分かっている成人の墓に関してはタカラガイの出土が低い（女性：13基中4基 30.8%、男性：7基中2基 28.6%）。
- ② 成人女性と男性の墓では、その他の貝（巻貝、二枚貝、真珠貝、円錐形の貝、樽形の貝など）の出土が多く（女性：13基中10基 76.9%、男性：7基中5基 71.4%）、子どもの墓ではその他の貝の出土が低い（19基中6基 31.6%）。
- ③ タカラガイの模倣品に関しては、子どもの墓での出土は低く（19基中3基 15.8%）、成人の墓では出土自体していない。

4. おわりに

今回、クシュ王国の王墓地6か所の墓を対象にタカラガイと貝類の出土状況を調べたが、予想以上に子どもの墓の出土数が少なかった。子どもの墓が集中しているメロエの西墓地は発掘報告書では「The Royal Cemeteries of Kush」の1つとなっているが、実際には王墓地ではなく高官やマイナーな王族の墓地と考えられている。メロエの南墓地もナパタ期は高官やマイナーな王族の墓地と考えられるが、子どもの墓は1基ほどしか確認されておらず、この子供の墓からは貝類の出土もないようである。基本的に王墓地は王や王妃など成人の墓であるため、子どもとタカラガイの関係を探るには、調査対象として適切でなかったかもしれない。ただし、ローヴァッサーがサナムについて「子どもの墓ではタカラガイが多いが、大人の墓からは他の種類の貝が見られる」と言及している点については、王墓地でも同じように確認できたことは非常に興味深い。

サナムの発掘調査は未完で終わっており、発掘者のグリフィス（F. Ll. Griffith）は詳細な調査報告書を出版しなかったが（発掘調査の報告は雑誌 LAAA = Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology のみ）、発掘時の調査カードや写真、グリフィスのフィールドノートなどを調べ、データをまとめたローヴァッサーの2012年の出版物 *Aspekte der napatanischen Gesellschaft : archäologisches Inventar und funeräre Praxis im Friedhof von Sanam : Perspektiven einer kulturhistorischen Interpretation* にはタカラガイが出土した墓の情報もあるが、墓の被葬者情報と一緒にになっていないため、データの照合作業が必要である。今後はこのサナムや、ナパタ期の他の墓地のデータを確認し、タカラガイと子どもの関係について探りたいと思う。

参考文献

- Dunham, Dows** 1950, *El-Kurru*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.1), Boston, Harvard University Press.
- Dunham, Dows** 1955, *Nuri*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.2), Boston, The Museum of Fine Arts Boston.
- Dunham, Dows** 1957, *Royal Tombs at Meroë and Barkal*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.4), Boston, The Museum of Fine Arts Boston.
- Dunham, Dows** 1963, *The West and South Cemeteries at Meroë*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol.5), Boston, The Museum of Fine Arts Boston.
- Lohwasser, Angelika** 2010, *The Kushite Cemetery of Sanam: A Non-Royal Burial Ground of the Nubian Capital, c. 800-600 BC*, London, Golden House Publications.
- Näser, Claudia and Giulia Mazzetti** 2020, “Of kings and horses: Two new horse skeletons from the royal cemetery at el-Kurru, Sudan”, *Archaeology International* 23(1), 122-137.
- Yellin, Janice. W.** 2020, “Chapter 29: The Royal and Elite Cemeteries at Meroe”, in Emberling & Williams (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York, 563-588.

¹ 第25王朝の編年については、最初の王をピアンキとするのか、王の治世年をどのように計算するのか、という点が研究者間で異なるため、文献によって年代にバラつきがある。また王位順に関しても、以前はピアンキの次はシャバカ、シャバタカ、タハルカ、タヌタマニと続くと考えられていたが、近年、シャバカとシャバタカの順序が入れ替わるという意見が支持されている。墓の型式や副葬品などからもその意見が正しいように思われることから、このレポートではシャバタカ、シャバカ、タハルカ、タヌタマニの4人の王を第25王朝とする。

² エジプトの年代については、展示図録「大英博物館ミイラ展：古代エジプト6つの物語」（朝日新聞社, c2021-2022）を参照。

³ 例えばトンボス (Tombos) やセディンガ (Sedeinga) といった新王国時代にエジプト側の行政を担っていたと考えられる地域では、エジプトの支配が終わった後も、人々が住み続けていたことが墓地の調査などで分かっている。

⁴ その根拠の1つはクシュ王国の王墓地クッルにある古い型式の墓であり、第25王朝の王たちに先行する人々の墓ではないかと考えられている。

⁵ ナバタ期の始まりについては、はっきりした証拠がないため研究者によって違いがある。

⁶ ピアンキと第25王朝の王たちの治世年はFrédéric Payraudeau 2014, “Retour sur la succession Shabako-Shabataqo”, *Nehet 1*, pp.115-127 のp.13と、Jeremy Pope 2019, “25th Dynasty”, in Wolfram Grajetzki & Willeke Wendrich (eds.), *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, Los Angeles のFig.5を参照した。

⁷ クッルのピアンキに先行する古い型式の墓の年代については、はっきりした証拠がないため、研究者によって設定年代が異なる。

⁸ タヌタマニの治世年に関しては研究者によって少々異なる。発掘報告書「Nuri」では664-653 BCEだが、現在、研究者から支持されている治世年は664-656 BCEのようである。本レポートでは664-656 BCEとした。

⁹ アトラネルサの治世年は発掘報告書「Nuri」を参照した。アトラネルサはタヌタマニの次のクシュ王だが、タヌタマニの治世年に関しては脚注8で述べたように研究者によって少々異なる。本レポートではタヌタマニの治世年を現在、研究者から支持されている664-656 BCEとしたため、アトラネルサの治世の開始年との間に差が出ている。

¹⁰ 西墓地は南墓地より数世代 (several generations) 早く利用が始まり (紀元前9世紀初頭以降)、メロエ期の終わり (紀元後4世紀中頃) まで継続して墓の造営が行われたと考えられている (Yellin 2020, p.570.)。

¹¹ メロエ西墓地の第25王朝の時期の成人女性の墓 (Beg. W 609) から出土したものの。

¹² 3件ともメロエ西墓地から出土。第25王朝の時期の子どもの墓 (Beg. W 643)、第25王朝を含むナバタ期の子どもの墓 (Beg. W 652)、メロエ期の被葬者不明の墓 (Beg. W 027) から出土している。

¹³ このピアンキの馬の墓 (Ku.220) は発掘報告書ではタヌタマニのものとされている。しかし、Ku.220 の墓のそばに位置するシャバタカの馬の墓 (Ku.209 と Ku.210) からピアンキの初期の即位名「Men-kheper-ra」が入ったファイアンス製のカルトゥーシュが見つかっていることから、ピアンキとタヌタマニの馬列が入れ替わる可能性が示されている (Näser and Mazzetti 2020, p.134.)。